東方劣化伝

籠の中の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方劣化伝

【Ｎコード】
Ｎ１６８３ＢＡ

【作者名】
籠の中の鳥

【あらすじ】
ある男がいた。その男はどんなに努力をしてもダメだった。　そんな男が転生したお話――

プロローグ

一人の男がいた
その男は呪われていた

どんなに努力をしても勝つことができない
どんなに努力をしても一番になれない
どんなに努力をしても笑われてしまう
それでも彼は努力を止めなかった

理由は簡単だった
彼は負けず嫌いだったからだ
負けると分かってて負けたくなかった

友達を作ろうと頑張った
でもできなかった
それでも作ろうとした

気味がわるいといわれた
それでも男は笑った
周りに笑われた
お前は何もできやしない
男は笑った
だから努力すると
周りに言われた
お前はバカだと
男は笑った
そうだねと言った

ある日女がやってきた
どうやら人を何人も殺したらしい
もう逃げられそうにないようだった
彼女は言った

証拠はすべてなくしたと
だけど私は逃げ疲れた
だから代わりに自首してくれないかと言った
そして最後にこう言った
友達でしょと
男は言った
友達だと思ってくれてありがとう
男はいいよと言った

男の裁判が始まった
処刑で確定だった
男は笑った
そして言った
ごめんなさいと
それが誰に
それが何に

何のために
どうして言ったかは分からない
そして数週間後
男は死んだ
女は笑って言った
狂人者が死んでよかったと
そんな男の次の人生
それがこの男の物語

プロローグ（後書き）

二次創作は初めてなのでよろしくお願いします
矛盾など色々あると思いますがこれからよろしくお願いします

その男　過去に行く

「…」

一人の男がいた

「…ん…んん…」

男は目を覚まし、自分の周りを見回す
そこはただの森である

「…天国？」

そう言って男は立ち上がる
立ちくらみのせいかクラクラしていた

「俺って確か…死んだ…よな」

そう言って男は小さく笑った
ああよかったと、男は言った

「友のために死ぬのは初めてだな…いや、死ぬのは一回だけか」

そう言うと男はまた笑う

男には友はいなかった

初めてできた友のために死ねた男
その友がたとえ殺人者だとしても
男はよかったと笑うだけだった

「さて、じゃあそろそろ死神か天使でも来るのかな？」
そう言って男は胡坐をかいた
そして枝を拾う

「勉強でもするか」

そうやってある公式をかく

「1＋1＝……なんだっけ？」

男はバカだった

「えっと…」

男は次に漢字を書く

「漢字って字・・・どう書くんだっけ？」

男はバカだった

「…何しているの？」
「漢字を考えてる」
「は？」
「いや、漢字って字を思い出そうとしている」
「…かんじ？何よそれ」
「漢字は感じ、漢字であって感じである」
「…あなたは馬鹿？」
「バカだろうな」
男はふと思う
自分はだれと話しているのだろうと
「君は誰？」
「…私は永淋――八意永淋よ」
「これはご丁寧…自分は…なんだっけ？」

「あなた馬鹿ね」

「そうだよ？」

女…八意永淋は頭を抱えた

「なんで悩んでるんですか？」

「あなた…ここどこだと思うの？」

「天国か地獄か」

「違うわよ…そんなどこかの曲みたいに言わないで」

「そうか…天国か地獄かには天国か地獄かという曲はないのか」

「あなた馬鹿でしょ」

「何回も聞く永淋は天才でしょ？」

「ええ天才よ」

「そうか…羨ましいなぁ」

男は大きな溜息を吐く

それは本当に残念そうに、それは本当に羨ましそうに

「…それであなたはいったい何者？」

永淋はそう聞いてきた
男は考える———考えに考える
「人」
「でしょうね」
「えっと…生命体！」
「そんな難しいこと言ったみたいに言わないで…別にむずかしくもないわよ？」
「男？」
「ホントに？」
「多分…？あれ？違うのかな？」
「…あなたは男よ、間違いないわ」
「天才が言うんだから本当だろうな」
「はぁ…」
永淋は溜息を吐いた
何故だろうと男は疑問に思う
「名前もわからないって…あなたどこから来たの？」
「日本」

「…何よそれ？」

「天国か地獄かには日本という場所を知らないの？」

「ここは天国でも地獄でもないとさっき言ったでしょ？」

「そうだっけ？」

「そうよ…ここは地球であなたは生きてるわ」

「本当に？」

「あなたが霊でもない限りね」

「じゃあ自分は霊か…未練なんて別にないのに…」

「あなた…死んだの？」

「友のために死んだはず」

男は少し笑みを浮かべながら言った

「…なんでうれしそうなのかしら」

「だって、初めてできた友達のために死ねたんだ…これほどうれしいことはないよ」

「…そう」

しかし永淋は少し首をひねる

「自分…何か変なこと言いましたか？」

「ええ、だってあなた――――死んでないわよ？」

「そっか、自分は死んでないのか」

男はえらく納得したかのように言った

「…なんですぐに信じられるの？」

「天才が嘘をつくはずないと思うから」

「そう…」

永淋はまた大きな溜息を吐く

「なんで溜息吐くの？もしかして自分のせい？」

「ええそうよ」

「そっか…ごめんなさい、自分がバカなせいで…」

「もういいわよ、もう慣れたから」

「そっか、天才ってすごいな」

永淋は木に背中を預けながらながら言った

「…あなた、自分の家はどこにあるの？」
「知らないよ、ここがどこかも知らない」
「…行くあては？」
「ない」
「じゃあ私の家に来なさい」
「ありがとう、天才は優しいな」
「私は天才じゃないわ」
「あ、ごめんなさい…永淋さん」
「そういうことじゃ…もういいわ」
永淋は木から離れながらそう言うと歩きはじめる
途中で男のほうを向く
「…名前考えなさい、十秒以内に」
「うん———え？十秒で？」
「そうよ…1、2、3、4」
「えっと…えっと…」
「5，6、7、8」

「無一！」

「…無一？意味は？」

「えっと…無から一を作るって意味…あれ？無ってなんだっけ？」

「フフ…いい名前よ無一」

「ありがとう、天才が言うんだから間違えない」

「そうね、私は間違ったことは言わないわ」

永淋がほほ笑むと男――無一もほほ笑む
そして永淋はまた歩を進める

「はぐれないようについてきなさい」

「幽霊なだけに？」

「あなたは幽霊かしら？そしてなんにも意味をなさないわよそれ」

「あ、人間だった…しかもギャグにもなってないなんて…」

「あなた馬鹿ね…」

「認めざるを得ない…」

「さっきから認めてたからその使い方はおかしいわよ？」

「え？そうなの？」

これがバカな無一と天才な永淋が出会った最初の日であった――――

「そういえばさ、１＋１の答えってなんだっけ？」

「２よ」

「そうか…２か」

…多分続く

その男　過去に行く（後書き）

何とか1話も投稿完了・・・
しかし・・・ストック切れましたw

まあ次どんな感じに描くかは決まってるのでそこまで遅くはなりそうにないです

それではまた次回～

その男　世話になる

「へー！ここが永淋の家か…大きいな～！」

無一はそういいながら永淋の家の門を叩く
その時に発するドンドンという音をうれしそうに聞く

「そうかしら？ここら辺ではこれが普通よ」

「さすが天才は一味も二味も違うなぁ…あ、おいしそうって意味じゃないからね！」

「…そこまで私はバカじゃないわよ」

「そっか…自分バカだからいつも間違えちゃうんだよなぁ」

「それよりも中に入るわよ」

永淋はそういうと家の門の近くにあるベルに近づく
そしてそこに会ったモニターに手を触れる
すると家の門が自動で開いていく

「さあ、さっさと中に行くわよ」

「はーい」

永淋がそう言いながら家の敷地へと入っていく
無一はそれを追いかけるようについて行った

「おかえりなさいませ」

「はい、ただいま」

家の入口に立っていた女性が永淋に向かってお辞儀をした
その女性は無一に気づき、永淋に問いかけた

「お客さまでしょうか？」

「ええ、しばらく家に泊めるから」

「…！？永淋様…とうとう」

「いや違うから…路頭に迷ってたから保護するだけよ」

「そうですか…」

その女性はじっと無一を見始める

無一はそれに気づくとその女性を見返した
容姿は俗に言うメイド服である

「メイドさん？」

「めいど？私は家政婦です」

「家政婦？」

「レイ、そのことあまり話しはしないほうがいいわよ…バカバカしくなるから」

「そうだね、バカバカしくなるよ」

「はぁ…」

メイド――レイはそう言うと家の中へと言った

「…？」

「無一、彼女はロボよ」

「ロボ？」

「…ロボも知らないことはないわよね」

「機械だってことはわかるよ」

「そう」

「永淋が作ったの？」

「ええ」

永淋はそう言いながら家の中へと入っていく

無一はそれに付いて行く

「いただきます」

無一はそう言うと目の前の食べ物を食べ始める

「おなか減っていたのね」

「多分減っていたと思う」

「お口に会いましたか？」

「多分おいしいです」

「多分？」

「…ううんとてもおいしいです」

「あら珍しい、あなたの料理がおいしいだなんて」

「え？」

「勉強したのね、えらいわ」

「い、いえいえ…」

レイはもじもじとしながら喜んでいた
永淋はほほ笑みながら料理に手をつけた

…が、その顔はどんどん引きつっていく

「レイ…」

「はい♪」

「残念だけどおいしくないわ」

「ガーン」

レイはがっくりと肩を落とし、頭を机に伏せてしまった

「永淋様に怒られた永淋様に怒られた永淋様に怒られた……」

「…ショートしたわね、にしてもなんであなた美味しいって言ったの？」

「それはその…自分バカだから」

「…味覚もバカだと？」

「うん」

永淋は考えるしぐさをした後、無一を連れて部屋を出た

無一は驚きつつも何も言わず連れて行かれた

「あなた…流石におかしいわよ」

「…そうかな？」

「ええ…」

永淋は立ち止まり、目の前に会った部屋を空ける

その部屋には特に何もない普通…和風な部屋があった

「ここがあなたの部屋よ…何かあったらレイを呼んで頂戴」

「…？？わかった」

永淋はそう言うともう何も言わずに行ってしまった

無一はとりあえず部屋の襖を閉める

「…寝よ」

そしてとりあえず無一は眠り始めた…

永淋は実験室と書かれた部屋の中に入り何かの準備を始めた

「…あれは彼の能力？それとも呪いの何かなのかしら？」

永淋はそう言いながら少し微笑みながら準備をする

「実験のしがいがあるわね」

永淋は一層早く準備をしはじめた

その男　世話になる（後書き）

「え？ここって過去なのかな？」

「さあ…私にはわかりかねます」

「そっか」

無一はそっかそっかと納得した

レイはただじっと無一を見て言った

「あなたはバカなのですか？」

「うんバカだよ」

「そうですか…」

レイはそれを物珍しく見直すだけだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1683ba/

東方劣化伝

2012年1月6日20時50分発行